

「見る」

茂木健一郎

[1] ふだん何気なく暮らしていても、私たちの脳はとても多くの情報を捉えている。しかし、その内容はきわめて**豊穣**なため、とても脳の限られた記憶のシステムでは把握し尽くすことはできない。

[2] 脳に視覚的な記憶を蓄積するメカニズムは、ビデオカメラがテープなどの記憶媒体に映像を記録する**機構**とは全く異なる。そんなことをしていれば、脳は瞬く間にパンクしてしまう。ある瞬間にはたしかに視野の中に感じられている膨大な量の情報のほとんどは記憶にとどめられることなく、アメリカの心理学者ウイリアム・ジエームズの言葉を借りれば、「**意識の流れ**」と呼ばれる**心理的時間**の経過の中に消えていくのである。

[3] どんなところにいてもよい。自分の周囲にあるものをじっくり見て、感じることができれば、そこにはいかに**豊穣**な多様性が息づいているかといふことに気づかされるだ

ろう。私はこの文章を、米国のラスベガスのホテルで書いている。仕事に没入している限り、自分の前の**空間**の中にはさまざまなものがぼんやりと見えているだけであるが、一つ一つのものに注意を向け始めれば実際にいろいろなものがある。

[4] 原稿を書くのに用いているコンピュータの右側には、時計がある。時計の下には、なぜか爪切りがある。朝使つてそのままになっているのだろう。爪切りの横にはミネラル・ウォーターのボトルがある。その横には、カエルの顔の形の小銭入れがある。これは、昨年インドのコルカタを訪問したときに路上で買い求めたものだ。小銭入れの下にはホテルのカードキーがある。そして、そのさらに右側にはオレンジジュースの入ったコップがある。こんな調子で、私の視野の中に入っているものを一つ一つ記述していくたら、とんでもなく長い文章になってしまいそうだ。これらのものは、仕事をしている間、私の視野の中にたしかに入っていた。現代の脳科学の専門用語で言えば、「**視覚的アウェアネス**」（視野の中に何かがあると気づいている状態）の中で、間違いなく把握されたいた。

[5] その一方で、これらのものは、私が一つ一つに注意を向け、言葉で表さなければ、概念として定着されることはなかつた。もし、私がこれらのもの一つ一つを見て、右の文章に書き留めることをしていなかつたら、仕事を終えて部屋の外に出た私の記憶の中から、これらのものの存在はすっかり消えてしまつていたことだろう。

年 番 名 前 組

[6] 私たちは、視野の中に見えているさまざまのものを、その時々で「**要約**」して認識している。「見る」という体験は、その時々の意識の流れの中に消えてしまう「**視覚的アウエアネス**」と、**概念化**され、記憶に残るその時々に見ているものの「**要約**」という二つの要素からなる**複合体**なのである。

[7] つまりは「見る」ということは贅沢な「源泉掛け流しの温泉」のようなもので、**視覚的アウエアネス**の中に立ち現れるさまざまのものたちはほとんどは**概念**にも記憶にもとどまらないままに消えていく。そんな**儚い**、しかしだからこそ贅沢な**空間性**、**並列性**の中に、私たちの日々の**視覚的体験**は進行していく。

[8] 「見る」という体験は、実に不可思議である。**要約**しなければ、言葉にも何にも置き換えられない。しかし、そのようにして記憶した情報は、もともとの**視覚的体験**と比較すれば、必ず多くのものが欠落している。**要約**だけではなく、その時々で消えていくってしまう**視覚的アウエアネス**の中のさまざまなものたちがなければ、「見る」という体験は完結しない。実際に巧みな**要約**と、その時々で消えていく圧倒的な**豊穣**が相まって、「見る」という体験は成立する。

[9] **要約**とその時々で消えていく**並列的**なもののたちの間には必ず**ギャップ**がある。だから、私たちは、見ているようで見ていない。そのことは、誰でもいいから自分の親しい人のほど忘れてはいる。

[10] その人と会つているときの**視覚的アウエアネス**の中の**豊穣**な体験は、意識の流れの中で時々刻々と失われ、後には**抽象的な「要約」**だけが残る。脳の中には情報量がかなり落ちた要点だけしか残っていないから、目の前にその人がいるときの**鮮烈な視覚的体験**は、再現することができない。

[11] かと言つて、**要約**する脳の働きがなければ、私たちは目の前に広がる世界を理解することができない。**大脳皮質**の右半球の**紡錘状回**が損傷すると、「**相貌失認**」という症状が現れる。目の前にいる人の顔が誰だかわからなくなってしまうのである。私たちは、ふだん、顔を顔として認識することなど当たり前だと思っているが、実際には数多くの情報を「**要約**」しなければ、顔が顔だとはわからない。**紡錘状回**が損傷すると、意識の流れの中でその時々で消えていく「**掛け流し**」のイメージは残るが、それを「顔」として要約する能力が失われてしまう。脳の機能の一部が失われて初めて、私たちはふだん何気なくやっている「見る」という体験の**神秘**に思い至る。

[12] 絵画という芸術は、「見る」という体験の奥深さを教えてくれる。部分をとれば單な

年番組前名

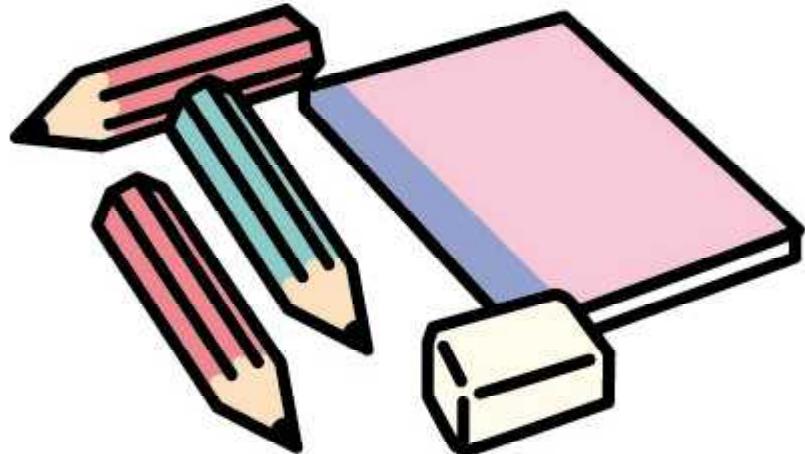
る絵の具の付着にすぎない存在が、空間的に並列したあるパターンをとることによって、かけがえのない歴史的作品へと変ずる。空間的に広がった「模様」を要約する脳の働きがなければ、絵画は絵画として成立しない。一方で、その要約だけでは汲み尽くせない何かがあるからこそ、絵画は時に聖なるイコノと化す。

【13】現存する作品が十数点とも言われるレオナルド・ダ・ヴィンチの絵画は、そのどれもが人類のかけがえのない財産である。とくにダ・ヴィンチが生前手放さず、現在はルーヴル美術館にある「モナ・リザ」と、ミラノのサンタ・マリア・デッサレ・グラツィエ教会にある壁画「最後の晩餐」は特別な位置を占めている。

【14】「モナ・リザ」が一九七四年に上野の東京国立博物館で展示されたとき、私は小学校六年生だった。親に連れられて見に行つたことをよく覚えている。博物館の周りを何重にも列が取り囲み、数時間待つた。いよいよ絵の前に来たと思ったら、あつという間に流されてしまった。姿を見たのは、おそらく数秒くらいのことだつたろう。

【15】その後、ルーヴル美術館でもつとゆつたりと「モナ・リザ」を見る機会があつたが、たつた一つの絵が人間の心に及ぼす作用というのは、驚くべきものだと思う。もともどはボプラ材の板の上に載せられた油絵の具の集合体にすぎない「モナ・リザ」を前にして、人間の脳が深い感銘を受けるのも、視野の中に見える「モナ・リザ」の部分部分が

- 3 -



ノート一冊 削つてある
ノートがある。鉛筆は二本こちら
を開く方が右側

を向いており、一本は左を向いて
いる。ノートは右側にある。
ケシゴムは一番手前にある。ノートの八分
の一くらいの大きさ。

イメージが付かない語の分析と対策

- ① 比喩表現ですよ
→ 比喩をイメージしてみよう。
- ② その語の組み合わせが分からぬ
→ 対になる語を考えてみよう。
- ③ 単に言葉の意味を知らない。
→ 辞書で引く。
- ④
→ 他の部分の記述を参考する。
- ⑤ 本当はイメージできている。
→ 自分の判断で判別できればイメージできているよ。

集積してある印象を与えるからである。印象を結ぶ脳の編集、要約作業は、何の変哲もない光景を見て生じるプロセスと変わりはない。その過程で、他の絵を前にしたのでは得られないようなる抽象的な「要約」が生まれるからこそ、「モナ・リザ」は特別な意味を持つ。

【16】しかし、その「要約」だけでは、「モナ・リザ」の前に立つという体験を再現することはできない。その絵の前に立つとき、さまざまな要約が脳の中では現れ、深化し、変貌し、記憶される。その一方で、絵を構成する色や形などの細部は、決してそのすべてをとどめておくことができない「意識の流れ」の中で、時々刻々失われていく体験として、私たちの魂を通り過ぎる。

【17】何かをつかみつつも、指の間から砂がこぼれ落ちるように圧倒的に失われつつあるものの。その豊穣な喪失こそが、絵を見るという体験の本質である。もし、脳が、ビデオカメラのようにすべてを半永久的に記録できたとしたら、絵画という芸術はこれほどの吸引力を持たなかつたろう。